

三力一は

草でうまくなる

②



草生栽培の6月のミカン。4~5月に倒した春草が枯れ始めている

草は自然に枯らすのが一番

和歌山・岩本 治

ミカンをつくって30年になりますが、草生栽培を始める前も今も、さまざまなことを試してきました。慣行栽培はもちろん、除草剤の使用のあるなし、有機栽培、無農薬栽培、無肥料栽培などです。こういった経験から、現在の草生栽培を始めるまでの流れを今回は紹介したいと思います。

ミカンには肥料が必要

まずは、無肥料で20年間ミカン5本を栽培してみました。ミカンには肥料が必要かどうかを試すためです。樹の変化をわかりやすくするために、あえて樹勢の弱い極早生の「徳森」という品種を選びました。無肥料なので、収穫すれば土壤養分は当然減っていきます。若木は本来盛んに生長するはずですが、4年もすると幹に緑色のコケが生えて弱り、その後は収穫量がどんどん減っていました。

慣行栽培では肥料分、とくにチツソ

をりえることで、果皮に厚みが出てきまます。肥料を与えない樹は果皮が薄くなつて実にくつつくようになります。

また、樹が弱つて細根が少なくなつたからか、糖度が落ち酸味が残るようになつたことに加え、新葉も減り、葉の厚みや光沢もなくなつていきました。

原種に近い夏ミカンなどは樹勢が強いので、無肥料栽培でもできるのかもしれません。しかし、交配種を使い、

肥料分は不可欠だと考えました。肥料分は土壌改良もする

肥料の種類もいろいろ試し、現在は有機肥料を使っています。有機肥料は肥料分を与えるだけでなく、土中の微生物を殖やし、团粒化や細根の増加にもつながります。すると前回も紹介したように、樹が肥料を吸いやすい土壤環境ができあがります。

化成肥料はすぐに効きますが、微生物のエサにならないので土壤環境は改良できません。使い続けると土が硬くなり、根の吸収能力が落ちてしまいま

草を刈つたら かえつて旺盛になつた

次に本題の草対策について試してきました。春と夏に除草剤を散布するのが一般的なのは、春と夏に草が大きく育つて作業の邪魔になる

まず、草を刈つたら、株元は残るの

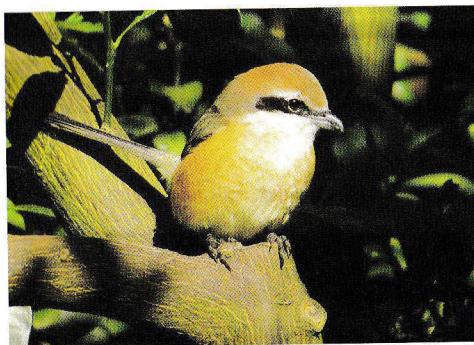
で根は枯れませんでした。イネ科雑草にいたつては分けつしてしまい、かえつて旺盛になつてしまつたのです。春草の場合、4~5月に刈つたので6月に草が増えてしましました。6月はミ

からです。

ただ、除草剤を連用すると耐性を持った草が増えるので、倍率を高くしたり、展着剤を加えたりすることが必要になります。散布回数も増え、労働時間や費用の増加はもちろん、土壤生物や土壤微生物を殺してしまつので、土壤環境が悪くなつていきます。

畑の中を歩いて、土が硬くなつているなど感じたことはないでしょうか。私はそう感じ除草剤を使うのをやめて、草を刈るか倒すかの二つの方法を試してみました。

現在、草生栽培をしている私の園地



草生栽培している筆者の園場にいるモズ。歩いた後にバッタが飛び出てきて、それをモズがくわえるという具合で、畠ではモズがずっとくっついてくる

**果実・野菜用自動選果選別機
マイコンセンカキ**

大好評発売中

省力化抜群!

- 正確さ抜群! 電子秤使用。コンピューター制御で簡単規格登録! +一ボタンでグラムを合わせるだけ!
- 4種類の作物を登録: ボタンを選ぶだけ!
- 作物を傷めない: 特製吸収スポンジ使用!
- 誰でも扱える: 止まっている測定皿に乗せるだけ!

(株)エトバス TEL 150-0045 東京都渋谷区神泉町23-6 TEL 03(3465)0844㈹ FAX 03(3465)0850 お問合せの際は、作物名と電話番号をカタログ進呈

(和歌山県海南市)

草刈りするとアブラムシに困る

さらに、草の生長の流れを見ていくと、そこに来る虫の生態もわかつてきました。たとえば、アブラムシは春にカラスノエンドウに付いて繁殖します。その時期にカラスノエンドウを刈つたり、除草剤で枯らしたりすると、新葉が出始めているミカンにアブラムシが移動して被害が出ます。そうなると、ミカンへの農薬散布が必要になります。

くなりました。また、自然に草が枯れると根まで枯れるので、土中の根があった空間に空気が入り、根の呼吸に必要な酸素も供給されます。

つまり、草は自然に枯らせばミカンの生育を邪魔しない、むしろ生育を助けてくれるということがわかったのです。

では、アブラムシが隣地の畠から移つてくる以外でその被害を受けたことも、農薬散布をすることもありません。それどころか、アブラムシやカイガラムシを食べててくれるクサカゲロウの幼虫などの天敵が増えます。そして、ミカンは食べずに、虫や草の実を食べるホオジロやモズ、ヤマガラなど

の鳥たちが住みついてくれます。

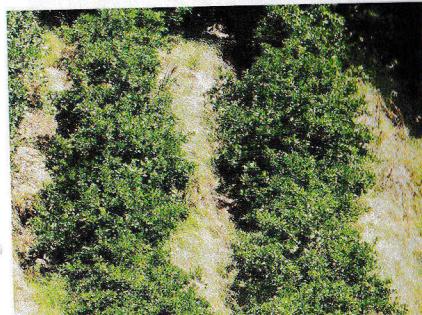
こうして草の処理を試すなかで、ミカンの樹や土壤環境にとって、草は自然に枯らすのが一番だと実感しました。ただ、倒すにも労力が必要なので、歳をとつても続けられるよう、草丈が低くて作業しやすい草を探し始めました。次回はどんな種類の草がいいのかというお話をします。

慣行栽培



5月の慣行栽培の畠。草がないので土が流亡し、石ころがたくさん見える

草生栽培



7月中旬の草生栽培の畠を上から見たところ。倒した春草が枯れ、ところどころに見える青い草が夏草



15年間草生栽培をした畠の土。スコップがサクッと入るほどやわらかい。団粒構造ができている証拠。有機物の腐植化が進んでいるので黒い

草が自然に枯れた

次に草をそのまま生やし、ひざの高さまで伸びた時期にミカンの樹のまわりだけ草をホール（三角ホール）で倒してみました。春草は4～5月、夏草は7～8月にそれぞれ倒しました。

すると、春草はミカンの根が伸びる大事な時期の6月に、夏草はちょうどミカンの収穫時期に、自然に枯れたのです。

倒れた草が地面を覆うと土が隠れます。おかげで、雨のしぶきで跳ね上がった病原菌が、垂れ下がった果実に付着しておこる褐色腐敗病がほとんどな

カンの新葉が出た後に、根が伸びにく大事な時期です。冬や春の草と養分競合すると、肝心の果実への養分が不足してしまいます。

「いつそ抜いてしまえばいいだろう」と思うでしようが、根まで引き抜くのは大変なことです。